

『赤い珊瑚と、甘い棘』

著:弓月あや

ill:カワイチハル

齋に『珊瑚』と名づけてもらった数日後、医者が木戸家へやってきた。診察を受けた珊瑚は格段に回復していると、褒(ほ)められる。

その往診が終わったあと、齋はなにかを思案しているように考え込んでいる。サンルームに用意されたお茶を飲みながら、珊瑚は首を傾げた。

「齋、どうしたの？ ぼく、だいぶ傷が治ったって言われたよ」

珊瑚の報告に、そばで給仕をしていた宗司も嬉しそうだ。

「ご回復が目覚しくて、よろしゅうございました。お食事も残さず召し上がられるので、コック長が喜んでおります。それに最近は、お勉強も進んでおられますし」

褒められて、珊瑚が年相応の顔で笑った。宗司の言うお勉強とは、珊瑚につけられた家庭教師が教える勉強のことだ。簡単な国語と日常の生活に関するすべてのことを、教師に教えてもらっていた。

なにもかもが順調だ。なにより珊瑚が健康を取り戻しつつある。だが、齋の表情は変わらない。どうしたのだろうかと言っていると、ようやく齋は口を開いた。

「ああ、忘れていた。先日の珊瑚を、首飾りに加工してもらったんだ」

齋はそう言うと、宗司に「届け物を持ってきてくれ」と申し付ける。部屋の隅に控えていた宗司は、すぐに銀のトレイに載せた小箱を捧げ持ってくる。

箱を受け取った齋は、中から華(きゃ)奢(しゃ)な金の首飾りを取り出した。鎖の先には、以前もらった珊瑚がついていた。

「齋の珊瑚だ」

「いや。きみの珊瑚だよ。ちょっといいかな」

齋は座っている珊瑚の後ろに立つと、「髪を上げて」と言った。珊瑚が慌てて髪を掻き上げると、すぐに金鎖が回される。

「さあ、できた。少し長めにしたから、苦しくないだろう」

珊瑚が俯くと、きらきら輝く金の鎖と珊瑚が目に入った。とても美しい宝飾品だ。

「きれい……」

「こうやって下げておけば、なくすこともない。それに、よく似合う」

齋は改めて珊瑚を見据えた。

「珊瑚がこの家に来て、まもなく一ヶ月が経つ。具合がよくなってきたし、勉強にも慣れてきたようだ。そこで、折り入って頼みがある」

その勿体ぶった言い回しに、ふたたび珊瑚は首を傾げる。

「おりいって。ってなに」

宗司は込み入った話だと判断し、お辞儀をしてからサンルームを退出してしまった。二人きりになると齋は珊瑚を見つめた。

「きみに頼みたいのは、とても高貴な姫君の話し相手だ」

「ひめぎみって、なに？ こうきって？」

子供のような、なぜなに。これが始まると面倒だ。そう判断した齋は、先に話を進め

ることにした。

「説明はシャワーを浴びて、身綺麗にしたあとだ」

「みきれい？」

「一日一回、風呂に入ること。食事のあとは、歯を磨くこと。外から帰ったら、うがいと手洗いを必ずすること。髪を毎日梳かすこと。それから」

小言のような言いつけに、珊瑚の眉間に皺が寄る。斎は大好きだが、この口うるさいところは、どうにもいただけない。

「も、もういい」

「そうか。いいのか。では、シャワーにしよう。これからは、いつも身綺麗にして、いい香りをさせるのが決まりだ」

そのひと言に珊瑚は無言で固まった。今まで、お美津が入浴の世話をしてくれたけど、身体を洗うことはせず、絞った手ぬぐいで拭きただけだったからだ。

「あの、お風呂に入らなきゃ、だめなの……？」

「駄目」

「……ぜったいに、だめ？」

「そう。絶対に駄目だ。姫の話し相手を頼む以前に、まず、入浴の習慣だ。浴槽にお湯を溜めて入るのが一番だが、それが無理ならシャワーだけでもいい。お湯に入るのは疲れが取れるし、なにより、とても気持ちがいいんだ。座敷牢では味わえなかったかもしれないが、普通の暮らしをしていたら、当たり前前の楽しみだぞ」

「お美津に髪を洗ってもらったから、それは知っているけど……」

「そうか。美津に感謝だな」

□□□

斎はそれ以上、話を聞いてくれなかった。珊瑚の肩を抱いて部屋の中にある扉を開く。そこは、西洋式に造られた浴室だった。

大きな窓から日が差し込む浴室は、白いタイルが貼られていて、とても清潔そうだ。金色の、大きなシャワーヘッド。真っ白い浴槽は猫脚つきだ。

少女ならば歓声を上げる浴室だったが、珊瑚にとっては、まったく意味がわからない謎の空間だ。そもそも、風呂という概念さえ知らないのだから、風呂場も無意味なのだ。

「さあ。こちらにおいで」

斎は手際よく珊瑚のシャツを脱がせる。しかし、そこで手が止まった。

日に当たっていないため、珊瑚の肌は不自然なくらい白い。その白い肌の背中には、いくつもの傷痕があった。

火事による火傷じゃない。これは、火事以前の傷だろう。火事の前とはいえ、裂けたところは生々しい傷痕になっていた。その傷はひとつではなく、無数に残されている。

入院している間、背中も一緒に治療が行われていた。むろん、斎も背中の傷の報告は受けている。だが、話に聞くのと実際に目の当たりにするとでは、衝撃が違う。

斎の手が止まったので、珊瑚が俯いていた顔を上げる。ちょうどその対面に大きな鏡が貼られていたので、珊瑚の背中を凝視して、固まっている斎の姿が目に入ったようだ。

「あ、ごめんなさ、い。ぼくの背中、気持ち悪いでしょう」

「いや。……気持ち悪くなんかない」

「うん。お母さんは背中を叩いてから、気持ち悪いって言ってた。変な虫みたいで気持ち悪い虫め、虫めって言って、また叩くの。終わりがなかったなあ。だから、あんまり見ないで。気持ち悪くなっちゃうよ」

なんの感情も滲ませない珊瑚の声が、きゅっと止まる。背中に温もりを感じたからだ。

恐々と振り返ると、齋が珊瑚の背中に、掌を当てている。大きくて指が長い、とても綺麗な掌だった。

「変じゃないし、気持ち悪くもない。……この傷は、たったひとりで闘ってきた、きみの勲章だ。忌まわしい傷だが、負けずに頑張っていた尊い勲章だよ」

「とうとい？ くんしょうって、なに？」

またしても、なぜなにの質問だ。けれど、齋は嫌な顔をせず丁寧に答える。

「勲章には、ふたつの意味がある。ひとつは勲功や功労に、国家から授けられる記章。もうひとつの意味は」

背中に当てた掌に力を込めた。

「きみの誇(ほこ)りだ」

「ほこり？ ほこりって、なに」

「誇りとは自らの信念であり、矜(きょう)持(じ)である。人間にとって、なにより大切なものだ。誰にも傷つけられない、きみだけの尊い輝きだと思いなさい」

「きょうじ……」

ほこり。かがやき。きょうじ。とうとい。

なにを言われているのか、まだ教育途中の珊瑚に、わかるわけがない。だけど。

だれにも、きずつけられない、きみだけの、かがやき。

ゆっくりと水が染み込むように、頭の中に齋の言葉が届いた。

浴槽に張られたお湯が、窓から差し込む陽光を受けて輝き、きらきらと白いタイルに反射する。その揺れる水面を、珊瑚はじっと見つめた。

「齋って、すごい。ぼくの知らないことを、なんでも知っているんだね」

「別に、なんでも知っているわけではない。きみの語彙が少ないだけだ」

「ごい？ ごいって、なんだろう。ほら、もうわからない言葉が出てきちゃった。やっぱり、齋はすごく頭がいい。それに背も高いし、顔も綺麗だし、優しいし、……わあっ！」

うっとりとして齋を賛美していた珊瑚は、突然、齋に抱えられ、浴槽の中へ静かに沈められてしまった。温かいお湯が、肌を包み込む。

「私への礼賛は、ここまでだ。どれだけ褒められても、風呂だけは毎日、入ってもらおう。日本髪を結っていて髪を洗えない女性でも、風呂には入るぞ」

年寄りのようなことを言いながら、齋は珊瑚を浴槽の中に座らせると、海綿で肩や胸などを洗い始めた。柔らかい感触の海綿なんて、生まれて初めての経験だ。

木戸家に来てから毎日お美津が身体を拭いてくれていたが、お湯に浸かるのは初めてだった。珊瑚は入浴の心地よさに、思わず眠くなってしまう。

「気持ちいいだろう。これからは、毎日、自分で洗いなさい」

「ン。うん。……でも、齋は、一緒に入らないの？」

本文 p67～75 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>